

ロータリー理解推進月間にあたって

パストガバナー

若林紀男 (大阪東RC)



「ロータリーの目的」の第4項に“奉仕の理念で結ばれた職業人が国際ロータリーの活動を通して、国際理解、親善、および平和を推進すること”と記されております。近年のロータリーはその活動を第4項に主眼をおいているようです。この目的に合ったエピソードを思い出しましたので披露申し上げます。

<Episode 1>

南米のチリとアルゼンチンの両国間で国境問題が持ち上がり、国民間にも険悪な空気が流れておりました。

時のRI会長(1979~1980)ジェームス・ポリマー(テネシー州、シエルビービルRC)は1980年、会長主催親善会議に2国から各45組の夫妻を招き会議を持ちました。

初めはギスギスした雰囲気でしたが、会議が進むにつれお互いに親しく打ち解けて話し合うようになり、会議の終わりには両国民を和解させる方法まで話し合われ結論を得ました。彼らの関係改善への尽力が和解への大きな一助となり、以来両国は良好な関係を維持し続けています。

この功績を称えポリマー会長に国際共同委員会から名誉ある「アンデスのコンドル章」が授与されました。

<Episode 2>

イスラエル・パレスチナ問題でカナダ外相であったレスター・ピアソン(カナダ、オンタリオ州 オタワRC 名誉会員)は「オスロ和平合意」を推進した功績で1957年ノーベル平和賞を受賞、受賞した際に「人々がお互いを知らなければ世界に平和がありえるでしょうか？また会ったこともなければどうしてお互いを知り合えるでしょうか？」と述べたといわれています。

オスロのスカエンRCはピアソンに影響を受け、1994年に平和プロジェクト「シャローム・サラーム」を開始しました。このプロジェクトは、イスラエル人とパレスチナ人の大学生が半々のグループをオスロでの夏季講習プログラムに全額負担で招待し、彼らが協力して学び、遊び、食事を共にすることで、かつて敵と見做していた人々について新しい発見をするというものでした。

この2つは第4項の主旨におおいに適う良い事例だと思えます。

“世界の人々が相互理解を深め、更なる親交によって信頼を得ることが世界平和に繋がる”と信じて日々のロータリー活動に力を貸して下さい。

* 参考文献「奉仕の一世紀」